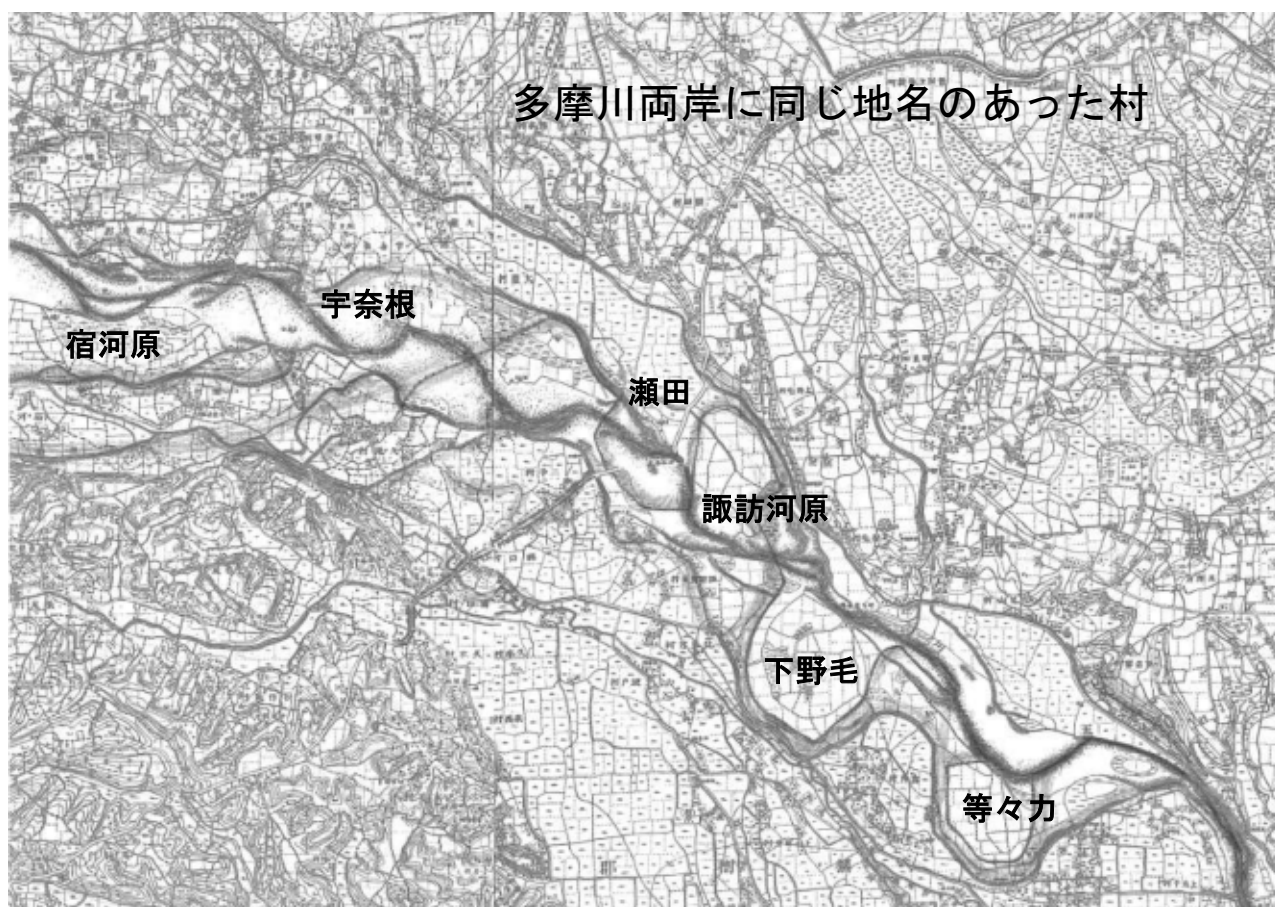


多摩川両岸の地形や土地利用からの考察

——高津区・中原区と世田谷区を中心に——



明治 14 年の頃(現在の高津区・中原区と世田谷区)の周辺図

平成 28 年度

川 崎 市

目 次

はじめに	・・・・・・・・	1
1、明治の土地利用図から	・・・・・・・・	2
2、多摩川新堤防の建設	・・・・・・・・	5
3、私鉄各社の鉄道敷設と市街化の拡大	・・・・・・・・	5
4、兩岸を結ぶ橋	・・・・・・・・	6
5、観光地としての多摩川周辺	・・・・・・・・	6
6、学校の進出	・・・・・・・・	7
7、農業の変化	・・・・・・・・	7
8、工場の進出と跡地利用	・・・・・・・・	8
9、国分寺崖線に沿った湧水分布	・・・・・・・・	10
10、川崎の60ヶ村を潤した二ヶ領用水	・・・・・・・・	11
11、多摩川の洪水の記録及び年表(抜粋)	・・・・・・・・	13
12、多摩川の流路の移り変わり	・・・・・・・・	20
13、町名の変遷から	・・・・・・・・	21
終りに	・・・・・・・・	23
付録：講演会資料	2017(平成29)年1月14日	中原図書館多目的室にて
多摩川北岸を歩く	2017(平成29)年1月28日	
多摩川南岸を歩く	2017(平成29)年2月4日	

はじめに

多摩川によって川崎市域と東京都世田谷区・大田区域などが境界をなし、両地域が歴史的に深く関係しあっていることは、資料のみでなく、日常的な部分で現在もその姿をいろいろな場面で知ることができる。

近年、川崎市と世田谷区や大田区と地域交流が盛んに行われ、渡し場の再現や文化面での交流など、市民を巻き込むような活動が行われている。

今回、川崎市の委託事業として、「多摩川兩岸の地形や土地利用からの考察」というテーマで、主に高津区・中原区とその対岸にある世田谷区を中心に、共通点と相違点を多摩川の成り立ちや歴史・文化の面から考え、それを地名と結び付けていくつかの事例を報告する。

多摩川が氾濫するたびに、流路が変わり、その痕跡が地図の上だけでなく、行政区画などにさまざまな問題をかかえていた。その最も顕著なものが、多摩川の氾濫を防ぐ強固な堤防を築くことであったが、兩岸地域の利害が絡んで実現できずにいた。明治40・43年の大氾濫によって、国を動かして、まず堤防を築くためには多摩川を境界とした神奈川県と東京府の境界を決定し、明治45年にようやく境界が決定した。

しかし、国の財政も厳しいことから、本格的堤防建設は更に遅れることになる。これは、アミガサ事件や有吉堤の事例から、よく知られることである。

また、多摩川を挟んだ両方の地域に、共通地名が存在することで、互いにどのような表記をするかなど、それぞれの行政単位での取り組みがなされている。その地名を残すか。あるいは部分的に表記に取り入れるか。まったく別の表記にするかなど、三者三様の表記となり、良い悪いは別として考えさせられる。

世田谷区は昭和7年に行われた、新たな区制導入によって新設された区で、それまでは荏原郡に属していた。そのような関係から、東京郊外として農業的色彩が多く残されていた。昭和初期の郊外電車の広がりや地域産業を大きく変え、その結節地である川崎にもその変化が押し寄せてきた。

鉄道の普及は、純農村を都市型の町に変化させた。その指標として道路と橋、学校進出、遊園地などの観光地化、農業の変容、工場の進出と跡地利用などの事象を捉えて検討する。

川崎側から世田谷側を見ると、緑のラインが続いており、国分寺崖線の緑はまだ残されていることが分かる。自然環境は大きく変わってしまったが、市民と行政がその再生に取り組み、六郷用水（次大夫堀）の復活が見られた。下水道の普及で河川が浄化され親水化も施されるようになった。川崎側の二ヶ領用水も、水量が豊富で、季節ごとに市民が楽しんでいる。それらの用水の過去と現在を結びつけ、地形や地名、橋の名などから現在に引き継がれていることを記す。

今ある地名の下に昔の地名が重なっている。地層のようなもの。町を歩いて再発見すると、また違う町の姿が見えてくる。そのような視点でみなさんも、調べてみませんか。その折の参考になればと、いくつかの事例を報告します。

1、明治の土地利用図から

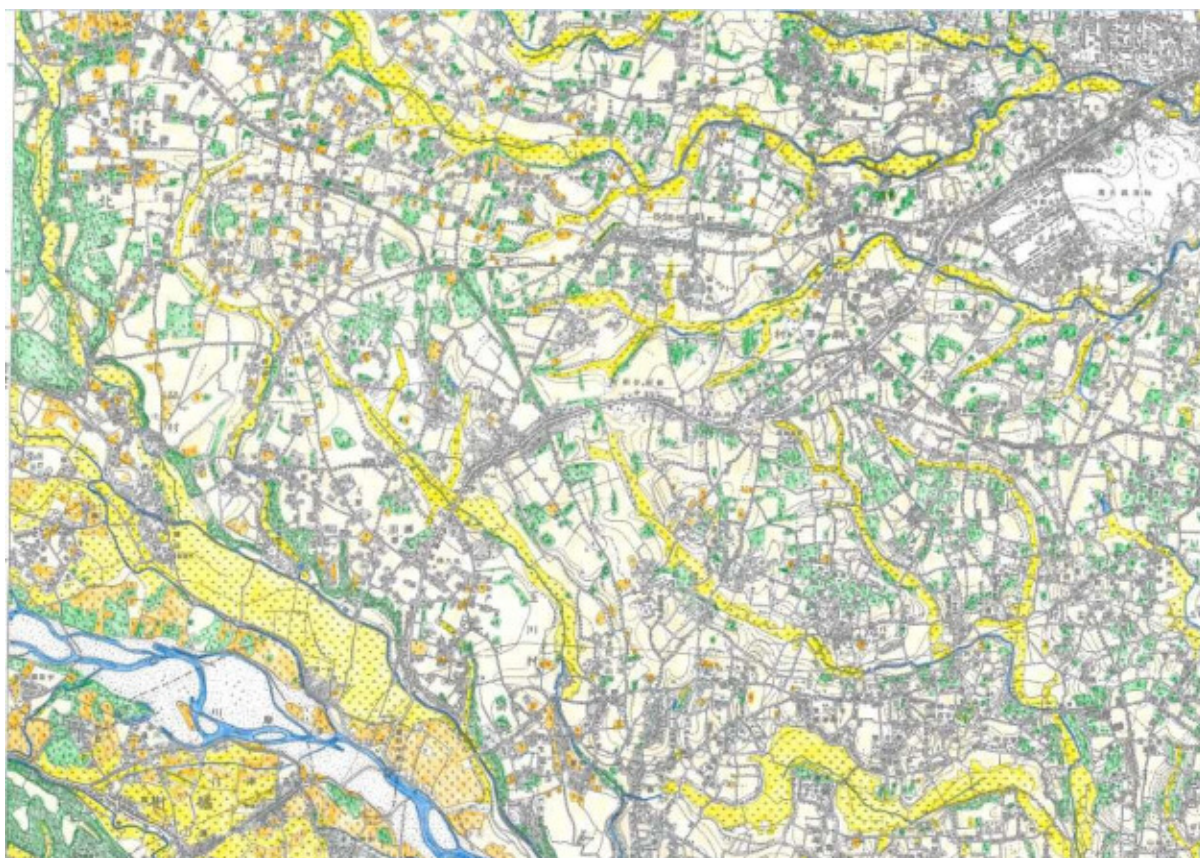
明治14年のフランス式地図に彩色を施し、土地利用の状況を見る。4枚の地図（溝口村、等々力村・用賀村、馬絹村、小杉村）をつなぎ合わせると、川崎市域の中原村・住吉村・高津村・橋村と世田谷区域の玉川村・砧村の主要部分を把握することができる。【次頁掲載】

江戸時代になると多摩川の流路も、ほぼ現在の流れに近い流路であったようである。多摩川が北流し、世田谷区域は、すぐに丘陵部（崖）が迫り、その下を六郷用水が流れ、また周辺の谷戸から流れでた河川が六郷用水に合流している。水田はその谷戸川の周辺と六郷用水沿いに限られ、地名で言うと喜多見・大蔵・鎌田・宇奈根付近に集中している。台地上は畑作と森林の記号が目立ち、蔬菜の栽培と薪炭の供給地であったことがうかがい知れる。集落は街道（主要道路）沿いに集中し、他は点在している。

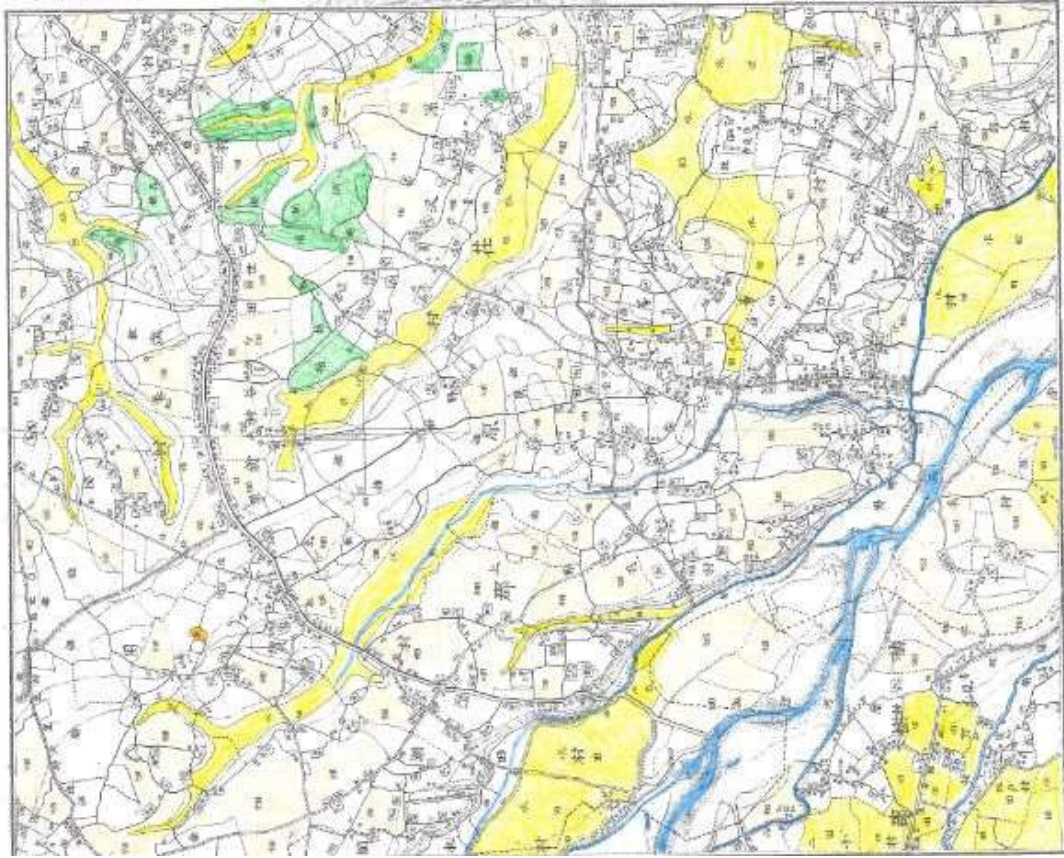
一方、川崎市域は、多摩川から丘陵部までの距離が広く、全てで水田として利用されている。河川敷に近いところは、畑地や荒地としてあり、丘陵部では畑地が目立つ。集落は、街道沿いを除くと、他は点在しており、世田谷区域よりさらに疎らである。

30年後の二万分の一の「世田谷」の地図（明治44年）に彩色してみると、あまり大きな変化はない。この前年に多摩川の大洪水があったときで、まだ、連続した堤防もできておらず、川の流路が河川敷内を蛇行して流れている。従来の畑作から、桑や茶などへの転換作物の記号が目につく。集落はかなり密集してきており、耕地と住居地の住み分けが進んできたように思われる。

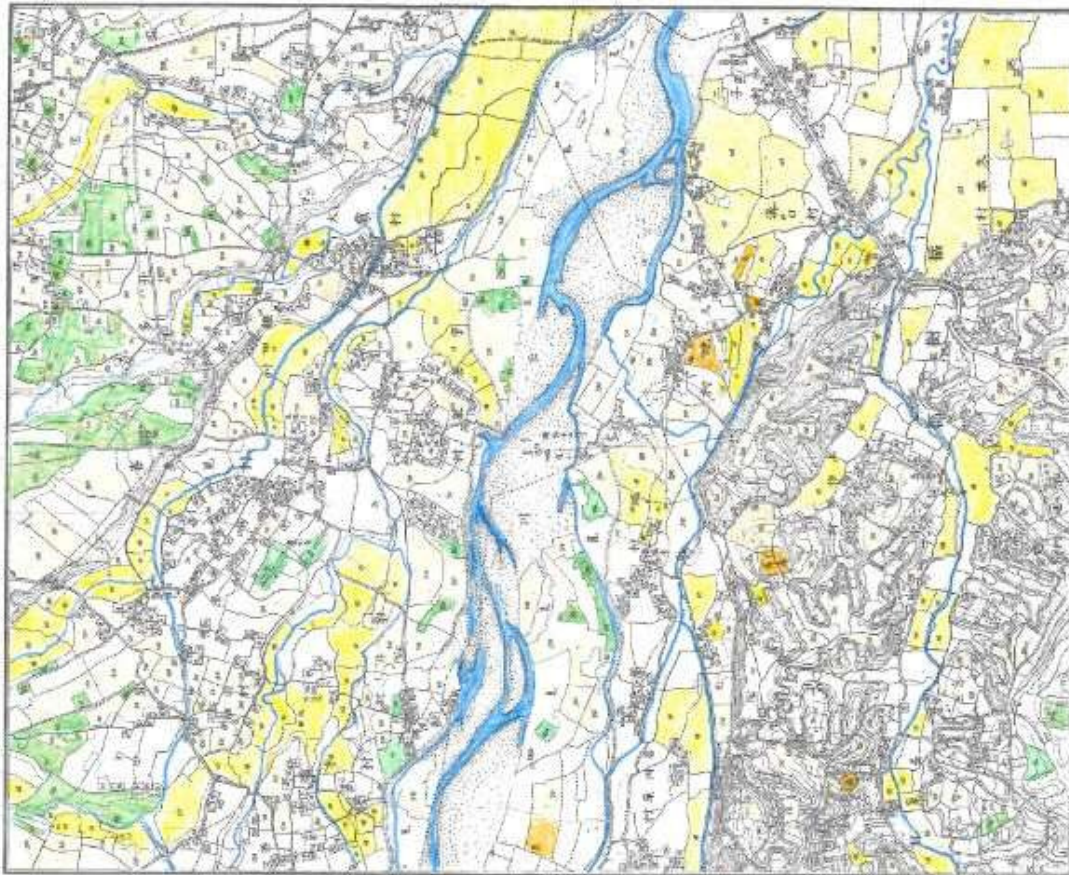
世田谷区域も川崎市域もまだ純農村の風景をとどめていると言えよう。



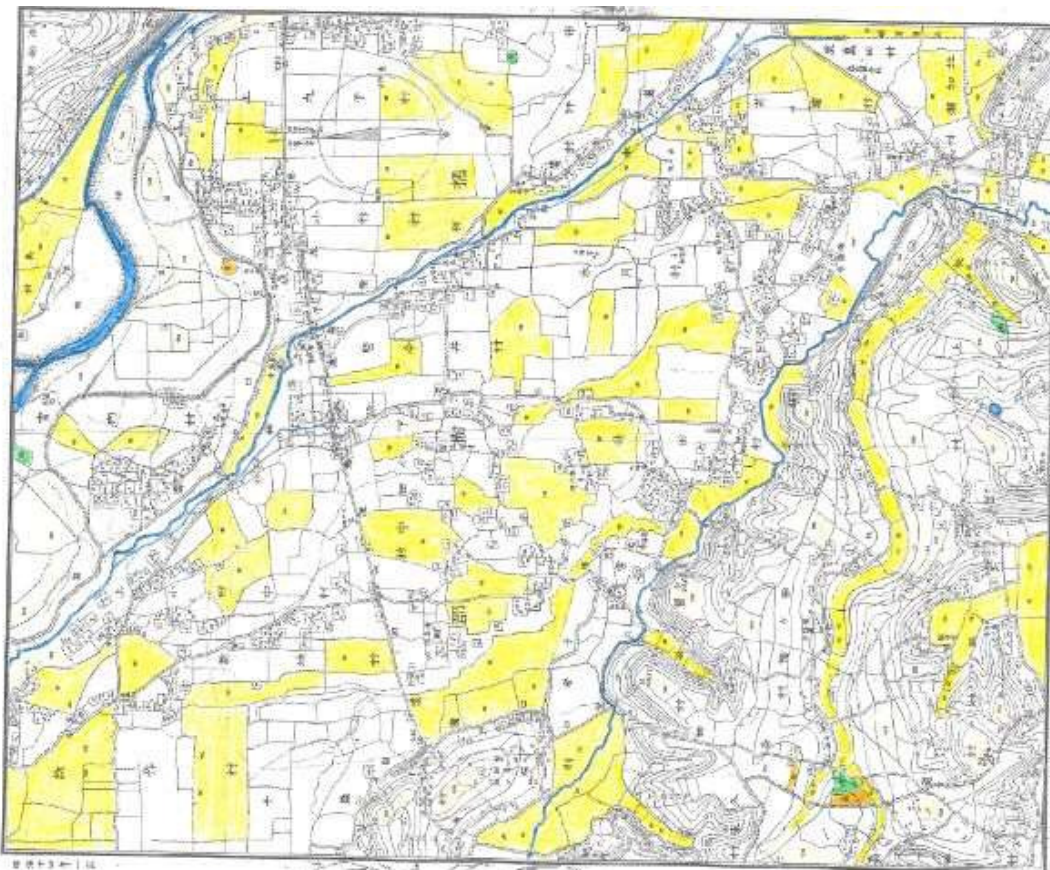
東京府武蔵国原住カ々郡及用賀村圖



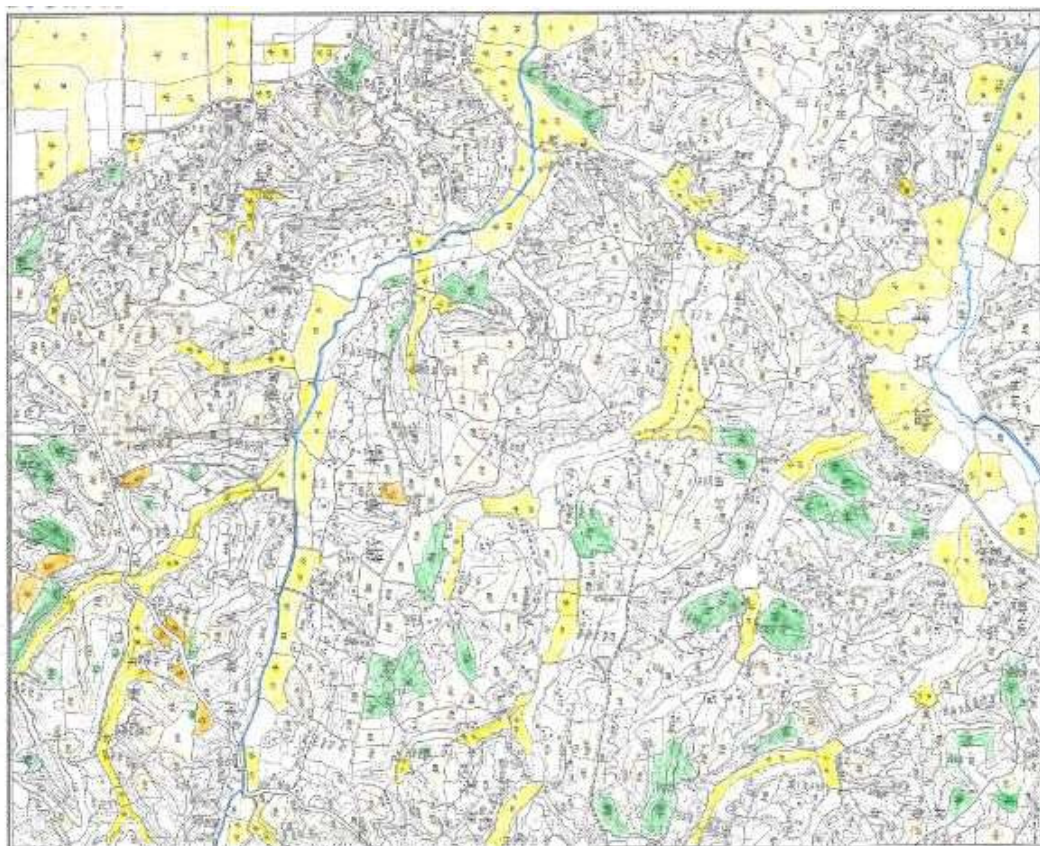
神奈川県武蔵国橋本郡溝口村圖



神奈川縣武藏國橋本郡小杉村邊村落



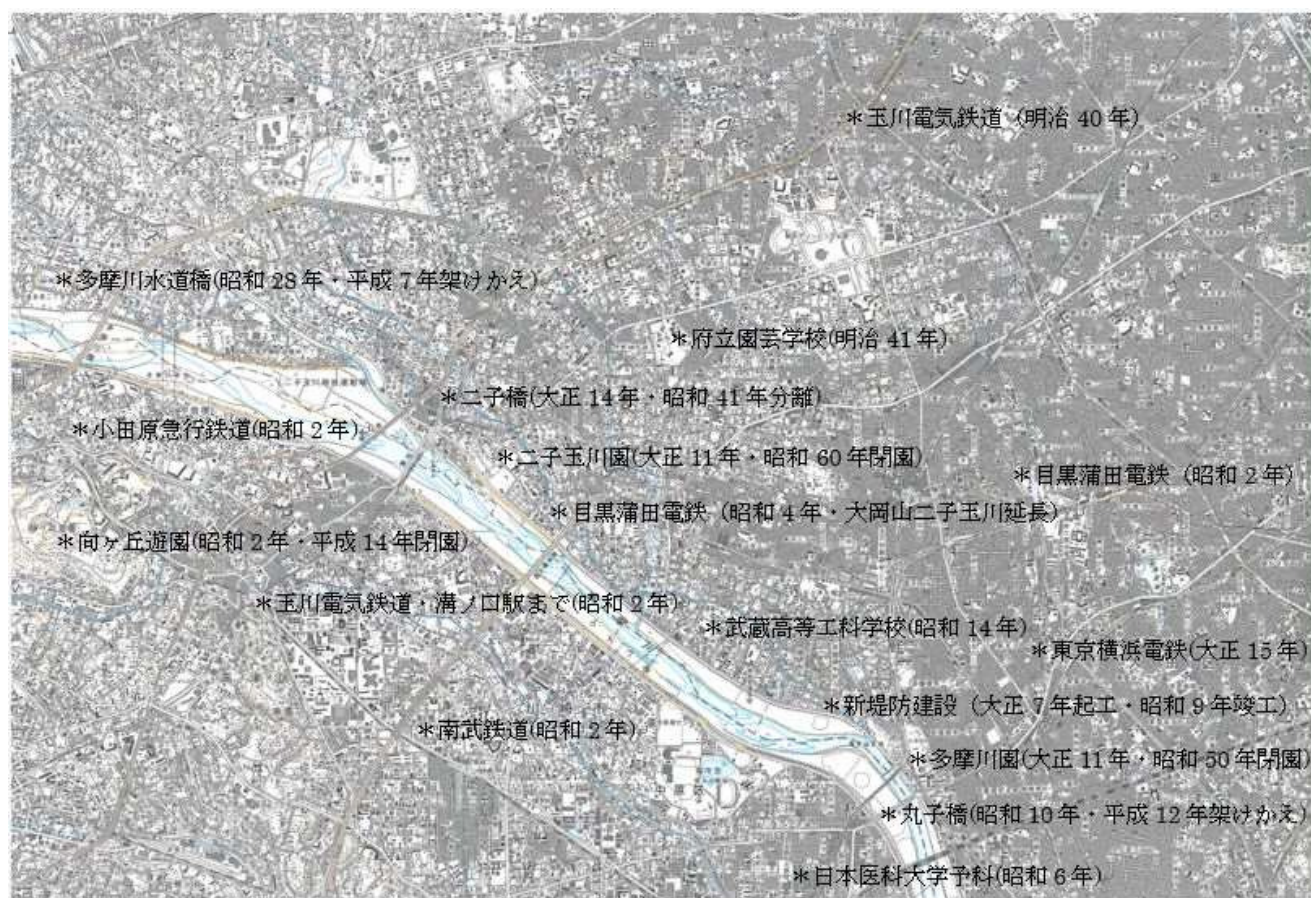
神奈川縣武藏國橋本郡馬都都山田村



2、多摩川新堤防の建設

住民の悲願であった新堤防建設は、ようやく大正7年に着手された。それまでの、部分堤防でなく連続した堤防にするため、堤防より多摩川よりになる集落が撤去の対象となった。現在の中原区上丸子にあたる青木根（オーギネ）集落は、堤防内に移転した。集落内にあった天神社を祀って、上丸子天神町となる。高津区瀬田はほとんどが河川敷であったため、諏訪と二子に挟まれた区画のみが、瀬田として残っている。

昭和9年に竣工したとあるので、多摩川下流域の新堤防は16年の歳月をかけて完成したことになる。それ以後、多摩川の堤防が決壊することはなかったと言いたいところであるが、昭和49年の狛江市猪方での堤防決壊は、決して災害は起こらないということに対しての警鐘である。



3、私鉄各社の鉄道敷設と市街化の拡大

明治末期から昭和初期にかけて、私鉄各社による鉄道敷設が町の景観を大きく変えることになる。これは、多摩川の砂利を東京市中に運び、建設材として使用することを目的とした。特に、関東大震災により、コンクリートの骨材として砂利の需要は増大していた。そこで、鉄道各社は多摩川に向って、鉄道を敷設することを申請し、許可された結果である。

川崎市と世田谷区域に限ってみても、そのことは明らかである。

- ・玉川電気鉄道が渋谷・二子玉川間を走る（明治40年）

- ・東京横浜電鉄が渋谷・横浜間を走る（大正 15 年）
- ・玉川電気鉄道が溝の口まで開通。二子橋を共用する（昭和 2 年）
- ・小田原急行電鉄が新宿・小田原間を走る（昭和 2 年）
- ・南武鉄道が川崎・立川間を走る（昭和 2 年）
- ・目黒蒲田電鉄が大岡山・二子玉川間を開通（昭和 4 年）

これらは、いずれもはじめの目的は、多摩川や相模川からの砂利輸送を主目的に敷設された。しかし、間もなく砂利の河川敷内での掘削が禁止となり、地域開発を目的に旅客輸送に切り替えて、鉄道の延長や周辺開発に着手するようになる。

4、両岸を結ぶ橋

鉄道による両岸の行き来が昭和 2 年ころには実現した。それまでは、多摩川の渡しが各所にあり、住民の足となっていた。自動車の普及や物資の流れの変化からも、橋の建設は急務とされていたが、実現には時間がかかった。丸子橋の開通にいたる思いは、安藤安氏の『待望丸子橋』に熱く語られている。年次を追ってみると、

- ・大正 14 年、二子橋ができる
- ・昭和 4 年、ガス送管専用橋（ガス橋）が架かり、人道もつけられる
- ・昭和 10 年、丸子橋ができる
- ・昭和 28 年、登戸に多摩水道橋が架かる

二子橋がいち早くでき、昭和 2 年には玉川電気鉄道が溝の口まで乗り入れられるようになった。しかし、丸子橋ができるまでにさらに 10 年以上の歳月を要した。

5、観光地としての多摩川周辺

多摩川周辺が観光地というと、現在ではイメージがわからないかもしれないが、昭和初期には都心から離れた憩いの場として注目された。私鉄各社は宣伝に努め、季節ごとに観光客を増やそうと知恵を絞った。南武線の稲田堤駅の名前は、京王電鉄が調布市の対岸の川崎側を稲田の堤・桜の名所として宣伝したことによる。丸子・二子・登戸には船宿があり、川魚を料理して提供し、文人墨客がその足跡を残している。その町に新しい観光地として、遊園地が誕生した。

- ・二子玉川園 1922 年（大正 11 年）開園、1985 年（昭和 60 年）閉園
- ・多摩川園 1925 年（大正 14 年）開園、1979 年（昭和 54 年）閉園
- ・向ヶ丘遊園 1927 年（昭和 2 年）開園、2002 年（平成 14 年）閉園

二子玉川には明治末期から玉川遊園地があった。この場所は二子玉川園と国道 246 号線を挟んで、ちょうど玉川高島屋の裏手の崖斜面付近にあり、主に大人を対象とした茶屋、船遊びなどを楽しむ施設で玉川遊園地と称していた。そこで、新しくできた遊園地を第二玉川遊園地と呼んでいたという。現在は、自動車教習所などに使用。

多摩川園は、田園調布都市開発計画のもと、周辺が高級住宅地として販売された。その折、地権者から多摩川園の用地も合わせて購入することを条件に開発許可をしたという。遊園地

の場所は、谷戸の奥にあたり、国分寺崖線からの湧水が豊富に湧出し、湿田の農地には適さない場所であった。そこで、東京横浜電鉄（現東急）は、遊園地を建設し、鉄道利用客の増加をねらった。現在は、大田区せせらぎ公園として一般に開放。

向ヶ丘遊園地は、小田原急行電鉄（現小田急）が開発し、駅名を向ヶ丘遊園（はじめは稲田登戸）とした。駅から遊園地までトロック電車を走らせ、観光客に喜ばれた。その後、モノレールを走らせるなど、新基軸で観光客の誘致に励んだ。現在は、一部を川崎市の藤子・F・不二雄ミュージアムとバラ園として市民に開放。

それらの遊園地も、新しいタイプの娯楽施設の建設で、客足が遠のき廃業し現在に至っている。

6、学校の進出

私鉄各社は、沿線の住宅開発と合わせて、学校の誘致を始めた。鉄道の利用客を増やすことと、沿線のイメージアップをねらうものであった。校地の多くは無償または廉価で提供され、郊外型の学校建設の先鞭をつけた。

- ・都立園芸高等学校（明治 41 年・東京府立園芸学校）
- ・東京都市大学（昭和 14 年・武蔵高等工科学校のち武蔵工業大学）
- ・日本医科大学（日本医科大学予科・昭和 6 年）附属丸子病院（昭和 12 年）
- ・法政大学第二高等学校・中学校（法政大学予科・昭和 11 年）（第二中学校・昭和 14 年）
- ・慶應大学日吉キャンパス（慶応大学予科・昭和 9 年）
- ・大西学園（中原高等女学校・昭和 3 年）

その後もその流れは続き、都心部から周辺部へ移転または学部増設など、多くの学校建設が行われた。

7、農業の変化

昭和 30 年代までは、川崎市域では水田があり、稲作が行われていた。しかし、全国的な米あまり現象と減反政策もあるが、主として、近郊農業として野菜栽培に転換する農家がでてきた。野菜の集荷施設や市場が整備され、自動車輸送も可能になり、農家個々人の判断で市場を選んで出荷することも可能となった。

昭和 37 年のオリンピックのころから、住宅建設が盛んになり、農地を手放し、住宅地となっていく。その頃の中原農業協同組合の預金高が日本一であったという、まさに建設ブームに沸いていた。

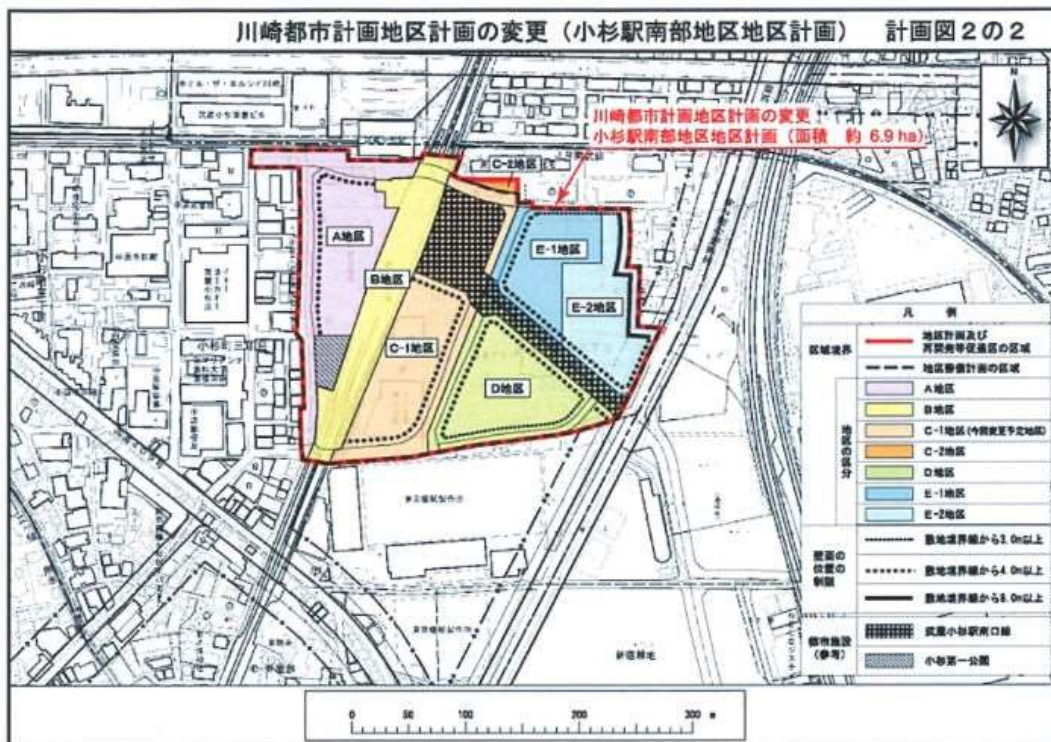
農家自体も変化が見られ、より収益の高い作物へと転換していった。その一つが、園芸作物であった。多摩川沿いの世田谷区と大田区の境にある玉堤・尾山台（尾山）、田園調布（上沼部）では、大正から昭和初期に温室栽培でカーネーションの切り花を出荷していた。一部は昭和 30 年代まで続いていた。その技術を、川崎市の中原地区の農家が入り入れ、カーネーションの栽培を行っていた。さらに、栽培種類を変えて、シクラメンや葉ボタン、セントポーリアなど、冬に特化した栽培を行ってきた。また、露地栽培では、パンジーの栽培が盛

んで、全国の公園やイベント会場の冬の景色を彩る格好の種類として喜ばれた。一時期はパンジーの出荷額が日本一になったこともあった。ちなみに、中原区の花はパンジーで、区のマークにも採用されている。高津区の農家でも、中原区から栽培技術を導入し、温室栽培や露地栽培を行っている農家が現在もある。一部には造園業に転換した農家もあるが、造園業は宮前区・多摩区の方が盛んである。

8、工場の進出と跡地利用

現在の武蔵小杉や溝の口周辺の再開発は、日本中から注目される地である。しかし、その土地のほとんどが、工場跡地に建設されていることは知られていない。

臨海部の工場は、鉄鋼や石油に関連する工場が大半を占めていた。一方、南武線沿線は、電気関連産業や輸送、光学などの業種がその多くを占めていた。南武線沿線にも明治後半から順次工場が進出してきた。その中で、現在も操業しているのが、向河原の NEC（日本電気）、中原の富士通（富士通信機）がある。戦時中は軍需産業として栄え、戦後は平和産業に転換し生産を行ってきたが、公害規制法により移転を余儀なくされたり、会社の合併等により閉鎖したりする企業が出てきた。



そのような工場跡地を再開発して、新しい町づくりが行われてきた。

現在の武蔵小杉駅東口は、横浜正金銀行(東京銀行のち東京三菱銀行)のグランドやその跡地と東京機械製作所(印刷機製造)の土地がほとんどで、更に不二サッシなどの企業地であった。中原市民館などの公共施設と高層マンション群、ショッピングセンターがほぼ整備し終わった。

武蔵小杉駅北口は、日本生命のグランドがあり、そこに社宅が建設されていた。駅前には

ホテル兼宴会場もあったが、取り壊されて駐車場になっている。ここも含め、高層ビルが建設される。

武蔵小杉西口は、大きな変電所の施設のあった場所で、再開発にあたって、変電所機能は地下に移動し機能している。ここは、ショッピング施設と中原図書館が入っている。さらに、旧中原図書館の敷地を含む一帯が再開発の対象になっており、それが完成すると、銀行・農協・病院・警察署などほとんどの施設が新しい区画として出来上がる。

横須賀線武蔵小杉駅南口は、NECの敷地の隣にあり、向河原駅にも近く、バスロータリーが整備された。ただ、南武線との乗り換えに時間がかかり、利用者の便をどう図るかが課題である。

武蔵溝ノ口駅周辺は、長年の再開発協議の結果、ようやく再開発がなされたが、当初の計画の半分程度に縮小されてしまった。それは、開発の全体像が見えなくて、完成してから、このように変わるのなら、もっと協力するのであったという声が上がっている。現に、今新たな再開発を行っているところもある。

駅北口は、ペDESTリアンデッキでつながり、それぞれの方向に広がっている。ノクティ―1と2があり、公共施設とショッピングモールがある。駅からは、KSP（神奈川サイエンスパーク）への無料バスが頻繁に出ており、使い慣れた人には便利である。また、近くにはイトーヨーカドーの大きなショッピングモールとマンション群があり、緑を配置した落ち着いた雰囲気である。ここが、日本光学川崎工場(北工場)の跡地で広大な土地が再開発された。KSPは池貝鉄工所跡地。

駅南口は、バスロータリーがほぼ完成し、間もなくバス系統の整備が行われるのではないか。南口側にある、洗足学園音楽大学は昭和21年に移転してきて洗足学園女子中学校としてスタートした。大学の沿革によると戦前から土地を入手していたようで、昭和17年の『溝ノ口』の地図には、更地となっている。その土地の南には日本光学川崎工場があり、現在の国税庁北税務署は国の地質調査所跡地にある。富士通ゼネラル(旧八欧電気)の工場がその跡地に建つ。

庶民性の残る溝の口周辺と町の姿がまったく変わってしまった小杉周辺、再開発でもその違いがわかる。

一方、二子玉川周辺の再開発は、また違った姿が見える。

大井町線が昭和38年に田園都市線と改称した。昭和41年に田園都市線の専用鉄橋ができ、二子橋から分離される。同年に長津田まで延伸した。玉川線が国道246号の交通量の増加で昭和44年に廃止になり、昭和52年に新玉川線が渋谷・二子玉川間で再スタートした。新玉川線ができると、田園都市線は半蔵門線と直通運転となり、大井町線の名称が復活し、大井町線は二子玉川駅が終点となった。現在は、複々線化により大井町線が溝の口駅まで入り、より便利になった。

玉川高島屋の土地は、農地を転用して昭和44年11月にオープンした。国内初の郊外型ショッピングセンターとして高級な品ぞろえで、デパートを身近に引き寄せたと川崎・横浜の人にも人気があった。

9、国分寺崖線に沿った湧水分布

ここまでは、社会的現象を中心に述べてきたが、ここから地形の観点で両岸を比べてみる。

200 万年から 50 万年くらいの間は、主に、多摩川は現在の武蔵野台地の上を流れていた。これを古多摩川という。また、秋川や浅川、大栗川などの前身となる相模川系の流れなどが存在した。これらの流れが徐々に、現在の多摩川の流れに近い流路に変わってきた。そして、武蔵野面を削って、国分寺崖線を形成し、そこから湧水が湧出して新たな河川が発生した。

(1) 国分寺崖線に沿った湧水地点と野川

国分寺駅の北側にある日立中央研究所の敷地内から湧き出た水が、野川の源流の一つである。また、西国分寺駅近くにある姿見の池も源流の一つである。この二つの湧水地点の地名が「恋ヶ窪」という。恋とは粋な名前であるが、コイはコウで崖のことである。さらにクボであるから、窪地から湧水が湧き出ていることから付いた地名である。姿見の池湧水群の流れは、中央線を挟んだ南側の泉町にある湧水と一緒に国分寺脇に流れ出て、お鷹道に沿って流れ、周辺の湧水をあわせて、日立中央研究所からの流れと不動橋で合流する。他にも崖面から湧水が見られたが、住宅地が形成されその姿が見られなくなった。その中でも東京経済大学敷地内の新太郎池が有名であった。今でも、水量は少ないが湧水が見られる。この付近の地名が貫井である。ヌクイは自噴泉のことで、あちこちから泉が湧いていたのであろう。この野川が三鷹市と調布市の境を通過して、狛江市に至り、六郷用水に合流した。六郷用水のできる前は、狛江の岩戸村・猪方村・駒井村内を通過して、一部は多摩川へ、一部は喜多見方面に流れていた。

(2) 深大寺湧水群を水源とする入間川

やはり国分寺崖線の調布市深大寺町周辺の深大寺湧水群の水を集めて流れてきたのが入間川である。入間川の名前は、調布市の入間町から取った名前である。小さな河川であったが、昭和 42 年に野川が氾濫するので、狛江境で入間川に付け替えられ、下流部は現在の野川となっている。

(3) 深大寺大沢付近を水源とする仙川

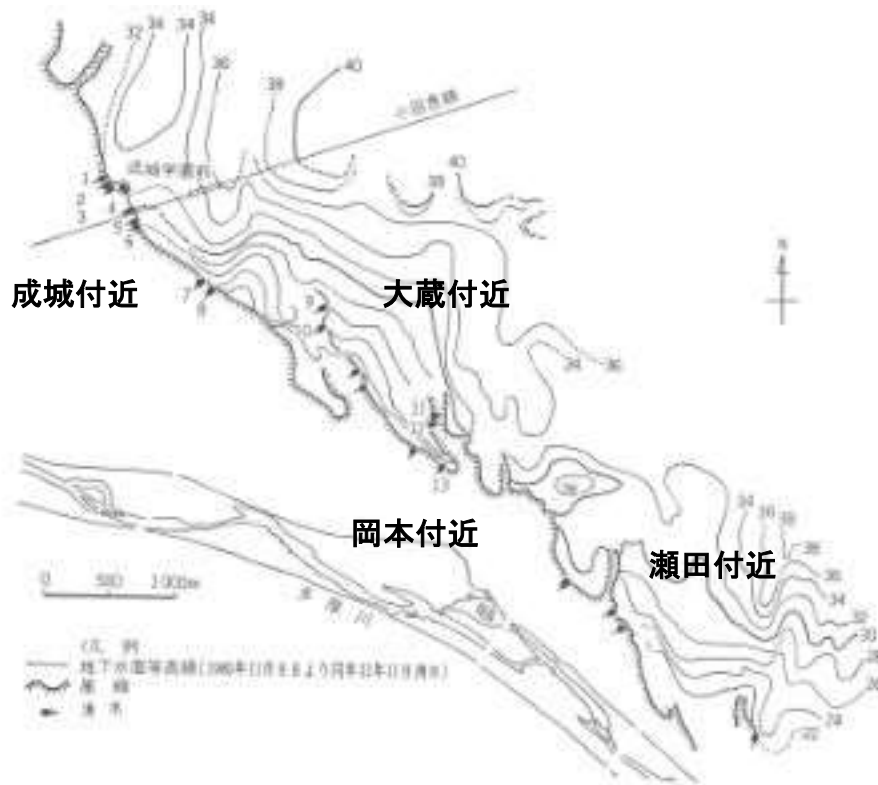
三鷹市深大寺と大沢付近からの湧水を水源とする仙川は、調布市の市境をぬけて、仙川町付近を流れるところからの名称である。世田谷区内では上祖師谷と祖師谷の境を流れて、成城の北部から大蔵に入り、鎌田で野川に合流している。

(4) 砧公園付近を水源とする谷戸川

岡本の静嘉堂文庫（旧岩崎別邸）敷地の東側を流れるのが谷戸川である。主な水源は砧公園付近から流れ出て、岡本村と瀬田村の境を流れていた。これも、野川に合流している。

(5) 用賀付近を水源とする谷沢川

谷沢川は矢沢川とも記される。用賀村付近を水源とし、深沢村・中町（野良田村）の湧水を集めて南下する。途中に野良田村の崖に姫の滝があったが、昭和 13 年の水害で大崩壊し、修復できず滝は消滅した。この谷沢川には等々力溪谷があり、崖線からの幾筋もの滝があり、そのトドロク音からの地名と言われている。



六郷用水沿いの崖にある湧水(新多摩川誌・地下水面等高線図より)

(6) 国分寺崖線の下を流れる六郷用水

慶長 16 年 (1611 年) に完成した用水で、小泉次大夫が川崎側の二ヶ領用水と同時に行ったところから、四ヶ領用水と呼ばれることもある。主に、大田区の六郷に通水したところから六郷用水と呼ばれる。世田谷では「次大夫堀」と呼ぶ場合が多く、「次大夫橋」や「次大夫堀公園」の名称が使用されている。

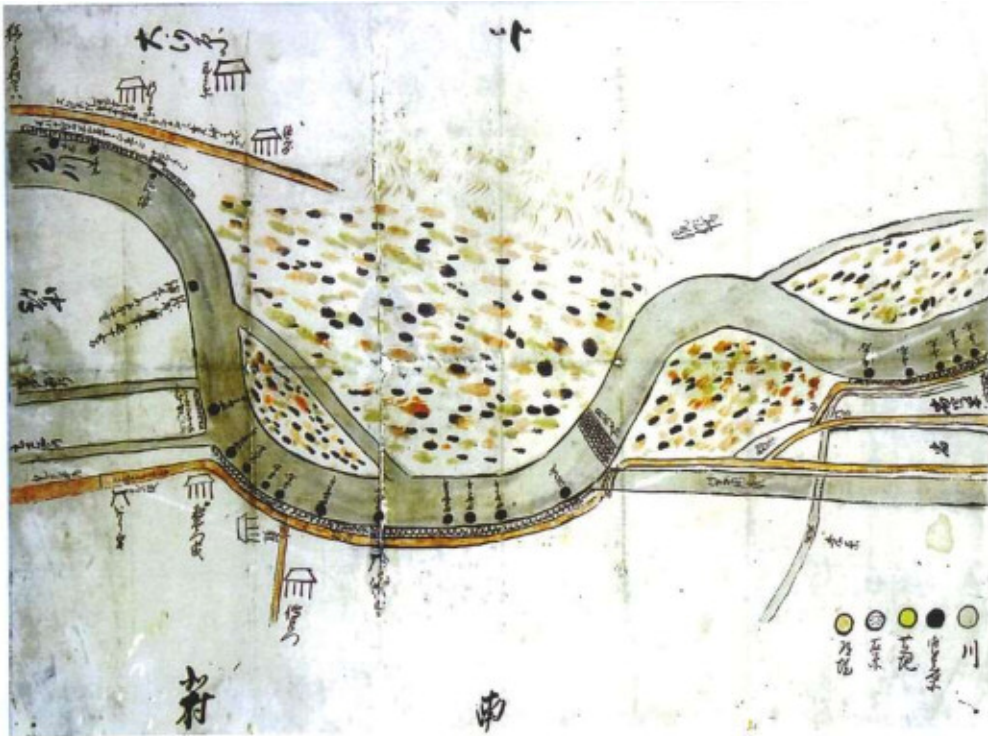
六郷用水の取水口は狛江市和泉にあり、岩戸・猪方・駒井をぬけて、世田谷の喜多見に至る。その後は、大蔵・鎌田・岡本・瀬田・宇奈根・下野毛・尾山から大田区の上沼部 (田園調布) へと流れる。この流れは、昔の多摩川の北流路である。北側には国分寺崖線の斜面があり、先に述べた河川がこの六郷用水に合流している。これらの用水を巧みに利用して、六郷用水として、下流部に送られていた。

六郷用水の取水口付近は、洪水のたびに流路が変わり、また取水口が土砂で塞がれたり、崩壊したりと苦労している様子が、多くの資料から読み取れる。多摩川の洪水のところで詳しく述べる。

10、川崎の 60 ヶ村を潤した二ヶ領用水

二ヶ領用水は川崎側の稲毛領と川崎領を流れるところから付いた名称で、中野島 (上河原) と宿河原の堰堤から取水している。従来、両方の取水口は同時か中野島が早く出来たように解釈されていたが、近年の研究で、宿河原での取水が早いことがほぼ裏付けられた。それも、現在の場所ではなく、宿河原村の八幡下塚樋の手前から取水していることが、宝暦の玉川絵図から読み取れ、少なくとも宝暦年間以降 (1763 年) に現在の場所に移ったことになる。

中野島は、田中兵庫によって新規に取水口を設けたという享保年間と考える。中野島からの用水を新川（シンカー）と地元では呼んでいるところからもうなずける。



宝永の玉川絵図 宿河原付近

宿河原の落合で、宿河原からの本川と中野島からの新川が合流し、久地のハケ下の分量樋で四方向に配分された。現在ある円筒分水も考え方は同じである。一番流量の多いのが川崎堀、二番目が根方堀、三番目が小杉堀、四番目が川辺堀で、水田耕地の面積に比例して配分された。川崎堀には七つの堰があり、中原・御幸・川崎・市場（横浜）の全ての田を潤すよう工夫されていた。

— 1 2 —

(1) 稲城と川崎北部を灌漑した大丸（おおまる）用水

二ヶ領用水は当初は宿河原からのみの取水であったことは、宿河原より上流部は大丸用水によって、灌漑していたことになる。大丸用水の竣工年は分かっていないが、ほぼ二ヶ領用水と同じころと考えられている。取水口は現在の稲城市大丸にあり、大丸から東長沼・押立・矢野口を経て、川崎の菅・中野島・登戸・上菅生・宿河原の村々に用水を運んだ。中野島に二ヶ領用水の取水口ができて、菅・中野島は大丸用水しか利用できなかった。

東長沼に「けんか口」という分水口があるが、ここで菅堀と中野島堀に分水しており、ここでの堰の高さでよく争いごとがあったという。

(2) 多摩丘陵から流れる三沢川

川崎西北部黒川の多摩丘陵の崖から湧出した川が三沢川で、稲城市の平尾・坂浜の小河川の水を合わせて、百村・東長沼・矢野口を経て、川崎の菅に至る。菅からは、一部は大丸用水にながれ、大部分は二ヶ領用水の新川に合流していた。

三沢川の名称は特に記録はない。多くの方は三本の沢があったと考えることだろう。

— 1 2 —

サワは川の流れて、ミは美称である。しかし、この川も大雨でよく氾濫した。そこで、下流部の菅で多摩川に放流する、新三沢川が昭和 16 年頃から工事が行われた。

(3) 都筑郡境から流れる五反田川

高石・細山から流れ出す五反田川。旧五段田村の名から付いた名称。川の両岸は狭く水田には適さない場所であった。農民に五反ずつ程度しか耕地を分配できないところからの地名。近年開発が進み、大雨による水害が発生し、改修が行われている。この川も昔は多摩川に直接流れていたのであるが、二ヶ領用水ができて、用水の一部として重要な役目をしていた。

(4) 溝ノ口に注がれる平瀬川

旧下菅生村から流れる平瀬川は堰が幾つもある、周辺の村々に利用されて上作延・下作延を経て溝ノ口に至る。溝ノ口からは、下ヤシキ堰（のちに上流部に中原堰）で取水して上小田中・下小田中・新城の用水として利用。また、そのほとんどが、溝ノ口・二子境の溝落と宮内・上小田中境の井田堰の手前で二ヶ領用水に合流していた。

平瀬川の名称は明治以降に呼ばれるようになった。由来は伝えられていないが、平時には比較的ゆったり流れていたのが平瀬と付いたようだ。一部に、長尾村の人たちが呼んでいたともいう。しかし、大雨の度に下流部の作延や溝ノ口の村々は出水に悩まされていた。そこで、津田山の下に隧道を掘って新平瀬川とし、多摩川に放流するようになった。

平瀬川は重要な川で、現在の二ヶ領用水の分水流路の多くが、旧多摩川の流路と平瀬川の流路跡を利用したと思われる。特に、多摩丘陵の崖下を流れる根方堀は平瀬川の流れであり、鶴見川系の矢上川につながっている。

上記の三河川（三沢川・五反田川・平瀬川）は全て二ヶ領用水につながっており、本線を補完する役目を担っていたことを、この際強調しておきたい。

11、多摩川の洪水の記録

多摩川の上流から下流までの洪水の記録は、『新多摩川誌』や各市町村が発行する『市史』などにその詳細が載っているので、ここでは、川崎市と世田谷周辺の地域に限って記す。といっても、川そのものは上流から下流まで一体のものであるから、その要因や関連するできごとは当然触れなければならない。

洪水の記録といっても、古くは余程その当時の政治に影響を与えたもの以外は、記録に残っていないので、中世以降に起こった出来事で、過去を推論することになる。

洪水の記録としては、二年に一回くらいの割合で記録され、数年に一度大きな被害が出ている、村名などが記録される洪水が起きている。

まず、右岸の川崎側を見ると、1200 年以降に、

多摩区 11 回 登戸、宿河原、菅、上菅生、二ヶ領用水取水口

高津区 2 回 北見方、諏訪河原、二子、溝ノ口、久地

中原区 3 回 上平間、平間

幸区 6 回 南加瀬、下平間、南河原

川崎区 13 回 川崎、川崎宿、六郷橋、六百代、大島新田

などの、地名が出てくる。

回数を見て多いと判断するか、少ないと判断するかは、別として、川崎ほどの地を指しているかわからない。川崎宿や六郷橋の浸水や流失は記録によくでてくる。上流部の矢野口と菅の境でよく堤防が切れたと言われ、いまでも堤防沿いのその場所に水神様（たとう様）を祀っている。中野島（上河原）と宿河原の二ヶ領用水取入口は上流から流れてきた砂が取水口を塞いでしまったり、土砂で取水口が壊されてしまったりしたと記録にあり、そのための普請が行われている。

これに対して、左岸の記録を見ると、

狛江市 30回 猪方、和泉、岩戸、六郷用水取水口

世田谷区 12回 喜多見、下野毛、井伊領、宇奈根、瀬田、大蔵

大田区 10回 羽田、六郷、池上、大森、矢口、嶺、古市場

と、特に狛江市の洪水の記録が飛びぬけている。

狛江市の和泉には六郷用水取水口があり、取水口が破壊された記録や、岩戸付近では用水路そのものが破壊されたとの記録もある。六郷用水のできる前、取水口近くに六所宮という神社があったが、洪水で流されてしまい、場所を移して神社名を伊豆美神社として再建したという。そもそもここは、川の流路としてはぶつかり易い場所であったようである。

万葉集にうたわれた「多摩川に 曝すてづくり さらさらに 何ぞこのこの こだかなしき」の歌碑が、文化二年(1805)白河藩主松平樂翁公によって、猪方村に建てられた。ところが、文政十二年(1829)に多摩川の洪水で流されてしまった。現在、歌碑は、大正十一年(1922)、六郷用水取水口跡近くに、原碑の拓本によって再建された。

昭和 49 年二ヶ領用水宿河原堰堤先の狛江市猪方で堤防が決壊し、家屋及び周辺の公園などが流失した。台風 22 号による集中豪雨で多摩川上流部で記録的豪雨となった。その原因とされた宿河原堰堤は爆破され、調査検討の結果、平成 11 年に新堰堤が完成した。

前の項でも触れたが、昭和 9 年に新堤防ができるまでは、連続した堤防はなく、その災害の程度に合わせ、区間毎に補強工事がなされていた。明治 40 年、43 年の関東全域に及ぶ大水害の結果、国会での決議によって、ようやく新堤防の建設に着手したのである。

※【洪水年表抜粋】

多摩川氾濫年表(抜粋)

元号	月・日	西暦	事項	詳細	左岸	右岸
元弘3年		1333年		分倍河原の崖下を古多摩川が流れていた。		
応仁2年	7月	1468年	大洪水	喜多見前河内にあった慶元寺(東福寺)が、大洪水により堂宇・寺宝・旧記等を流失し、現在地に移る。『新修世田谷区史』	喜多見	
天文19年		1550年	多摩川大洪水	六所宮が流失したため、祭神を大塚山から現在地へ移し、伊豆美神社とする。	和泉村	
永禄2年		1559年		「多波川北駒井本郷二貫七百文、同所登戸十二貫文、江戸駒井宿河原分飯島分」とあり、多摩川の北に位置していた。	駒井本郷、登戸、宿河原	
天正17年		1589年	多摩川の大洪水	下流の流れが南から北に変わって、ほぼ現在の流れと同じになる(江戸期の境界線)。		
慶長11年		1606年	多摩川大洪水	この洪水により、本川中流部左岸の分倍河原旧流路が現流路に移動したといわれる。		
慶長16年		1611年		小泉次大夫が指揮した、六郷用水と二ヶ領用水が竣工した。		
寛永6年		1629年		伊奈半左衛門忠克の手代篁助兵衛により、宿河原取水口新設。		
寛永21年・享保元年	8月	1644年	大風雨	江戸出水。多摩川大洪水で下流右岸川崎と左岸六郷で水害発生。家屋決壊、一円大水害『狛江の記録』。	狛江、六郷	川崎
慶安3年	9月	1650年	多摩川大洪水	羽田川筋流路移動。下野毛村の西南で堤防決壊し、近村まで河水氾濫す。翌年川筋の堀替を行う。『公私世田谷年代記』。	下野毛村	
万治3年		1660年		長沼村・大丸村と押立村・常久村多摩川境論裁許状により、川筋変更に伴う村境の裁定なる。		
延宝8・9年		1680・81年		中流部左岸の拝島用水(現昭和用水)に洪水が流入し、用水下流の大神村まで氾濫する。	拝島用水、大神村	
貞享年間		1684～87年		宿河原の本川と用水取水口の間うなぎ土手が切れ、用水の堰が悪くなり根掘り工事を行う。		宿河原八幡下

貞享2年	秋	1685年	多摩川洪水	<p>拝島作目村全戸流失。作目村は田中村の多摩川南岸にあったが、洪水にあい、田中村の段丘上に移り、同集落内に混住。村名は存続し、昭和13年に昭和町田中の一部となる『角川地名辞典』。上恩方村赤淵、笹原山崩起こり、川筋をせき止めたために洪水起る。黒沼田人数5人、馬1頭流失。駒木野、佐戸、小高井家42軒、人数35人、馬7頭流失、死亡『八王子市記録』。</p>	拝島田中村	拝島作目村、上恩方村
貞享3年	6月	1686年	多摩川洪水	<p>六郷橋川崎方の橋台が欠落し、石垣かつら石が崩れ、敷板も朽損する。</p>		川崎
寛政14年		1701年		<p>拝島堤決壊。</p>	拝島	
享保16年	7月	1731年	大雷大雨洪水	<p>浅川近辺。上恩方村山崩にて良泉寺倒壊(黒沼田)。</p>		上恩方村 黒沼田
寛保2年	8月1日	1742年	関東大風雨大水、 関東大水害、多摩川満水	<p>流路移動。関東大水のため玉川洪水となる。各所で堤防決潰し川通20里の間、緊急改修を要する箇所だけで百数十箇所。『公私世田谷年代記』。多摩川大洪水、右岸左岸とも決壊。流域の川崎各地で被害、川崎宿一帯浸水で幕府より拝借金『佐保田家・御用留』。八王子で、家3軒流失、人4人、馬1頭惨死。岩戸村用水路壊滅する。</p>	世田谷、 狛江岩戸	川崎宿
寛保2年	8月1日	1742年		<p>関東大洪水の水死者20万4144人『谷合氏見聞録』。小土呂、砂子、川崎宿、狛江、狭山、羽村堤防、洪水。8月1日、前代未聞の大洪水、多摩川洪水、養沢村大平の家屋五軒、山崩れのため埋没(秋川市史)。</p>	狛江、狭山、 羽村	川崎宿、 養沢大平
宝暦11年		1761年		<p>多摩川河道移動のため宿河原の二ヶ領用水取水口を変える。</p>		
安永8年	8月	1779年	大風雨洪水、関東風水害	<p>岩戸村用水堤大破。</p>	狛江岩戸	
天明3年	6月28日	1783年	大雨洪水。多摩川洪水、多摩川満水	<p>猪方村堤防決潰。大雨降り続き、関東諸川洪水。玉川洪水のため猪方村の堤120間切れ、下流の村々ことごとく被害。猪方村の堤築立に付、7ヶ村(駒井・岩戸・喜多見・宇奈根・大蔵・鎌田・岡本)より人足を出し、彦根藩が金74両を投じて自普請した『公私世田谷年代記』。</p>	猪方村、	

天明6年	7月	1786年	大雨大洪水、江戸大水、多摩川満水	大雨降り続き、各地に洪水。江戸浅草御蔵前往来川之如クニ成。関八州近在近国の洪水はことに甚しく筆紙に尽しがたしとぞ『武江年表』。目白山崩れ『東京都の歴史』。多摩川・鶴見川大洪水。下流左岸猪方村大堤破壊。	猪方村	
寛政2年		1790年	大洪水。多摩川洪水	下流右岸の矢ノ口・菅村境の堤防が決壊し、中野島村では人家が流失、登戸下流では床上4尺の浸水、このとき切れた所に、たとう様(水神)が祀られる。		矢ノ口・菅村、登戸
寛政3年	9月	1791年	大風雨洪水。多摩川洪水	猪方村堤防決潰。大風雨津波、玉川堤、猪方村8ヶ所240間、大蔵村7ヶ所200間余、宇奈根村6間、下野毛村30間切れる。田方に砂入る『公私世田谷年代記』。	猪方村、大蔵村、宇奈根村、下野毛村	
文化7年	9月	1810年	大雨大水	猪方村川辺、宿河原、中島江、稲毛、川崎二ヶ領用水取入口水門坎樋床替猪方村重八承知、上臥替5町余の寄洲忽流失百姓三軒屋敷欠落本村へ転宅致、田畑5、6町も欠落、それより以後本領大堤根水行今の形となる。	猪方村	
文化13年	閏8月4日	1816年	暴風雨。大風雨洪水。多摩川洪水	被害極楽寺、大善寺、小祠、門破損、大木倒壊および180余株、家屋損傷(居宅)千人町2、八木宿2、小門宿2、島之防宿3、本宿1、横山宿20、本郷村5、市外散田村3、新地2、巾野村8、横川村13、北野村7、元八王子村27、(僧院)犬目村3、川口村23、向谷7、諏訪宿6、下長房3、高尾山の神祠蘆毀壊10有、巨木倒伏多数『八王子市記録』。中流部左岸拝島堤、下流部右岸川崎堤決壊。大木等多く折れ、近来稀な被害(五日市町史)。	拝島	八王子、五日市、川崎
文政5年	5月～8月	1822年	多摩川大洪水	5月12日、浅川出水、田地水没1町余、多摩川大荒田地水没1町余。浅川流路移動。8月17日大暴風雨、秋、玉川沿い5ヶ村に水害あり。『公私世田谷年代記』。稲毛領村々被害。	玉川世田谷	浅川、稲毛領
文政6年	6月	1823年	霖雨洪水。多摩川洪水、多摩川大洪水、多摩川たびたび出水	大風雨により宿河原中野島両取水口が壊れ取水が困難になる。狛江堤防120間余大破、和泉村26間余決壊、猪方村30間余決壊。	狛江猪方村・和泉村	宿河原、中野島

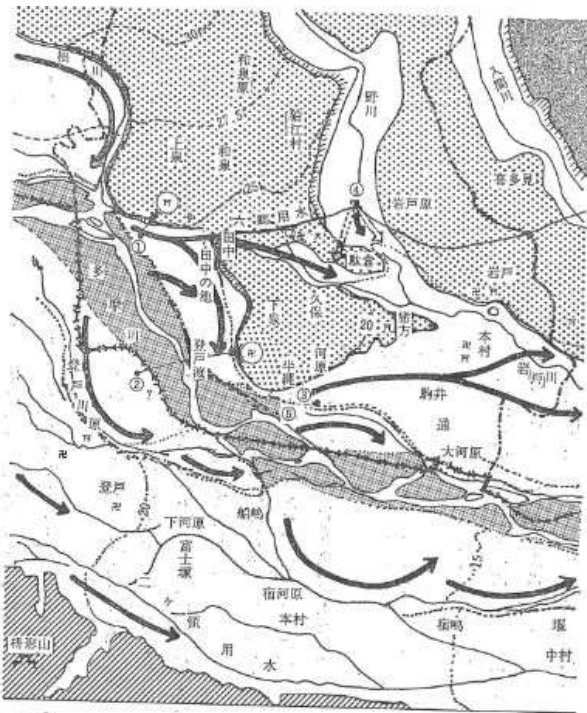
文政6年	8月	1823年	大風雨洪水	高尾山11人溺死。猪方村堤8か所切断、新堤築立。	高尾山、猪方村	
文政7年	4月～8月	1824年	大雨洪水。多摩川洪水	下流左岸8カ村水押し、中流部左岸拝島山王下決壊。	拝島山王下、玉川世田谷	
弘化3年	6月～7月	1846年	大雨洪水。多摩川大洪水	日野宿渡舟転覆32人溺死。中流部左岸拝島用水堰より氾濫。	拝島用水	日野宿
弘化3年	11月	1846年	多摩川大洪水、多摩川出水	川崎宿旅籠などが取り壊しとなる。瀬田村、和泉村、猪方村等被害。下流左岸猪方村、駒井村境より上の方幅100間余決壊。和泉村数か所120間決壊。	猪方村・和泉村、瀬田村	川崎宿
安政3年	8月	1856年	大風雨洪水。多摩川大洪水、大風雨多摩川満水	川崎地域各地で台風による家屋破壊、洪水による家屋の浸水。満水で下流左岸猪方村堀切断幅19間。和泉村堀切断、田畑一円に水害。	猪方村・和泉村	川崎
安政6年	7月24～26日	1859年	大雨洪水。多摩川大洪水	7月24日より大風雨26日まで続く。ところどころに出水、山崩にて人家潰れ、人馬ともに被害多し、上長房両塚橋落ちる『八王子市記録』。川崎地域各地で被害。羽村堤破壊され、玉川上水止まる。中流部左岸では福島村、中神村、宮沢村で家屋流出。多摩川満水11か村に被害、人家多数倒壊。福生牛浜の五日市街道も浸水。	羽村、福島村、中神村、宮沢村、福生牛浜	八王子上長房、五日市、川崎
安政6年	7月	1859年		和泉村一百姓人家5軒床上1～3尺浸水、雑穀、諸道具流失。堤切断500間以上、田畑8町5反歩被害。猪方村一大堤決壊、百姓人家9軒床上4尺浸水、田畑被害。岩戸村一百姓人家2軒床上3尺浸水、雑穀、諸道具流失、田畑8町余被害。	和泉村、猪方村、岩戸村	
安政6年	7月	1859年	大風雨大洪水	蓮光寺村下河原、府中文倍、芝間政村、小田分村、押立村等被害甚大	府中分梅、府中芝間、小田分村、押立村	連光寺下河原
安政6年	8月	1859年		猪方村字半縄下において堤20間決壊。	猪方村半縄	
慶応4年・明治元年	5月、7月、8月	1868年	大雨大水	5月、大風雨のため多摩川が出水し、六郷用水取入口の堀割が残らず壊滅。菅村と中野島村間の堤防が決壊。	六郷用水取入口	菅村・中野島村
明治6年		1873年	豪風雨	六郷川が出水し、東京～横浜間の汽車が不通。		
明治7年		1874年		3月、玉川上水羽村大堰の破損箇所を修理		
明治7年		1874年	暴風雨で激水	六郷橋破損		

明治8年	8月	1875年	暴風、多摩川洪水	江戸出水。六郷橋が破損。羽田村弁天橋が流失し、羽田獵師町、鈴木新田、八幡塚村など浸水。	羽田獵師町、鈴木新田、八幡塚村	
明治9年		1876年	多摩川満水	六郷橋水溢れて、八幡村の往還は舟で通行した。		
明治11年	9月	1878年	大雨大水。多摩川洪水	佐内橋流失、八幡塚村外数村堤決壊し、羽田村ほか25か村が浸水。北見方村、諏訪河原村の田畠が冠水。	八幡塚村外、羽田村ほか	北見方村、諏訪河原村
明治31年	8月、9月	1898年	多摩川出水	8月、調布町布田堤塘決壊ニヶ領用水ノ切元付決壊。9月、出水、高津村堤防決壊、久地村で堤防決壊し、二子・溝口浸水。ニヶ領用水宿河原取水口破損。		ニヶ領用水口、高津村、久地村、二子、溝口
明治40年	8月	1907年	大雨大洪水	各所で堤防決壊、川崎町全町浸水。大洪水、小和田橋・秋川橋等流失(五日市町史)。20ヶ所で堤防決壊。調布市など被害面積50町村、約4474町歩。	調布市など	川崎町、五日市
明治43年	8月	1910年	大雨大洪水、江戸大水、関東大洪水、多摩川氾濫	近代史上最大の大水害。稲城村押立天神下で堤防が決壊。上河原と宿河原の取水堰は大破。分量樋も破損。洪水により、六郷橋流失、しばらく渡船で対応。川崎大洪水。八王子、下恩方村1戸、佐戸2戸、案下1戸(上恩方)流失。二つの大型台風、同時に関東を襲い雨量1000ミリを越す、洪水のため小和田橋等ことごとく流失、五日市町の浸水家屋19戸、山崩れ等随所に起こる(五日市町史)。	東京側の記録	稲城村押立、上河原、宿河原、八王子上恩方村・下恩方村、五日市
大正4年		1915年	氾濫	御幸村泥海と化し、築堤工事箇所崩壊。		御幸村
昭和13年		1938年		水害により谷沢川の姫の滝が大崩壊した。復旧工事をしたが復元できず流路となる。	谷沢川の姫の滝	
昭和49年	9月1日	1974年	大風雨満水。台風16号	狛江市猪方の本堤防が約260mにわたって決壊し、堤内の住宅地3000㎡と家屋19棟が流失。高水敷の児童遊園地の諸施設も流れた。羽村堰下流右岸の本堤が高水護岸もろとも大きく崩壊した。浅川の八高線鉄橋、中央線鉄橋下流右岸の堤防が崩壊した。	狛江市猪方	日野市

12、多摩川の流路の移り変わり

洪水の記録と連動するが、多摩川の流路が洪水等により、変更している。時代区分をして示すことは、私の力では表現することができないので、流路跡から推論して、幾つかの事例を報告する。

まず、狛江市付近の図を見ると、六郷用水の流路に沿って多摩川が流れていたことが分かる。ここが、後に六郷用水の流路となった。和泉から猪方、駒井にかけて幾筋もの流路あとがあり、村がその度に分断されている。記録によると、川崎側にある中野島は多摩郡に属し、登戸や宿河原は駒井村に属していたとあることから、多摩川の北岸にあったことになる。明治45年の東京府と神奈川県境界を多摩川とすることが決定し、飛地の宿河原は駒井字宿河原となった。現在は駒井町の一部となった。



狛江市付近の旧多摩川の流路図

次に、宇奈根・久地の図を見ると、宇奈根村が多摩川によって二分されている。昔の流路は南に大きく蛇行して、久地境を北に曲っていた。そのため、しばしば境界論争があった。宝永7年(1710)の「久地村、宇奈根・大蔵・鎌田三ヶ村村境論裁許絵図(裏書)」や元文4年(1739)の「大蔵・鎌田・久地三ヶ村村境筋立合絵図」、寛政11年(1799)の「玉川大蔵久地水除論所絵図下書」がある。明治45年に、宇奈根村は東京と神奈川に分割されてしまった。東京側が本村であったため、川崎側は昭和2年に本村の氷川神社を分霊し、氷川神社を建立した。

同じように、諏訪河原村が大きく北に張り出していた。現在、川崎市に瀬田という小さなブロックが存在する。元禄5年(1692)の「瀬田村諏訪河原村寄洲訴訟裁決書(絵図)」がある。明治には瀬田村に諏訪河原村向河原があり、後に瀬田村諏訪と改称した。現在の上野毛2丁目に当る。



小杉・等々力両村の地境争論決済書絵図

享保2年(1717)の「小杉・等々力両村の地境争論決裁書」は、評定所にまで持込まれた裁判で、小杉村の言い分が通り、従来通りに耕作地として認められた。

また、文政7年(1824)の「上丸子村小杉村上沼部村境絵図」が度重なる洪水で境界線が分からなくなり、三者立会で境界線を決定したという絵図である。武蔵小杉駅北口の交番から北に真直ぐな道が中原中学校まで続いているのが、その時決定した村境である。

13、町名の変遷から

最後に、町名の移り変わりについて記す。多摩川により大きく影響を受けた所であり、両岸に同じ地名が存在するなど、親しみをもてる地域でもある。また、明治以降の社会的変化により、地名も変化を余儀なくされ、一部に消えてしまったものや地名本来の意味とは違う表記になってしまったものも出てきている。そのような中から、大きく三つに分類して、町名の変遷を記してみる。

(1) 消えてしまった町名・地名

世田谷区 横根村→大蔵村の一部→桜丘一～五丁目、砧一丁目、大蔵一丁目、砧公園
野良田村→玉川中町一～二丁目→中町一～五丁目
廻沢村→千歳台
下代田村→代沢一～五丁目
高津区 清沢村・岩川村→千年村
中原区 なし

(2) 新しく生まれた町名・地名

世田谷区 砧村→砧町→砧一～八丁目、砧公園
千歳村→千歳台
駒沢村→駒沢町→駒沢一～五丁目、駒沢公園
玉川村→玉川町→玉川一～四丁目、東玉川一・二丁目、玉川台、
玉川田園調布一～二丁目
世田ヶ谷→羽根木
代田→代沢（代田・北沢）、大原
喜多見→喜多見成城→成城町→成城一～九丁目

高津区 清沢村・岩川村→千年村→千年、千年新町
子母口・千年→子母口富士見台
上作延・梶ヶ谷→向ヶ丘・宮崎
下野毛
瀬田

中原区 下沼部
 等々力
 上平間→田尻町、北谷町
 今井→今井上町、今井仲町、今井西町、今井南町
 荻宿・北加瀬→大倉町・西加瀬
 井田→井田一～三丁目、井田三舞町、井田杉山町、井田中ノ町
 木月→木月一～四丁目、木月住吉町、木月伊勢町、木月大町、木月祇園町
 小杉→小杉町一～三丁目、小杉御殿町一・二丁目、小杉陣屋町一・二丁目
 上丸子→上丸子山王町一・二丁目、上丸子天神町、上丸子八幡町、
 新丸子町、新丸子東一～三丁目、丸子通一・二丁目
 新城→新城一～五丁目、上新城一・二丁目、下新城一～三丁目、新城中町

(3) 短縮・省略された町名・地名

世田谷区 下北沢→北沢一～五丁目（下北沢駅）
 下野毛→野毛町→野毛一～三丁目
 経堂在家→経堂町→経堂一～五丁目
 上馬引沢→上馬町一～三丁目→上馬一～五丁目
 下馬引沢→下馬町一～三丁目→下馬一～六丁目
 小山村→尾山村→玉川尾山町→尾山台一～三丁目
 上祖師ヶ谷→祖師ヶ谷一・二丁目→上祖師谷一～七丁目
 下祖師ヶ谷→祖師ヶ谷一・二丁目→祖師谷一～六丁目
 高津区 諏訪河原村→諏訪→諏訪一～三丁目
 中原区 なし

川崎市は、基本的に旧地名・町名を継承する形で、住居表示施行後も経過している。但し、既存の町名に丁目をふる傾向にあり、町の姿が見えなくなっていることは否めない。可能な限り、字を生かすことを望みたい。

世田谷区では、旧東京市の影響で、地名・町名が何度か変更してきた経過がある。そのため、数例であるが、旧村名が消えてしまった。また、道路を境界として住居表示を施行しているため、以前の町や村とはちがう町名になっている場合もある。

終りに

多摩川兩岸の地形や土地利用の観点で、調査を行ってきたが、今回記述したことは、今まで多くの先人が実際に歩き、人々と語りあって、調べあげたことの再構成である。地名を基調に時代を経て移り変わっていく事項や施設等の建築物などから、兩岸の共通点や相違点を検討してみた。

まとめに際して、市民に講演する機会を得て、また二回にわたって現地を紹介できたことは、市民の関心を知る意味でも、大きな意義があったと感じている。

二ヶ領用水や六郷用水の流れは、かつて旧多摩川の流路であり、その分水も度重なる流路変更の跡であることを今回は強調してきた。現に、その跡を歩き、多くの方に実感してもらった。世田谷側の崖斜面は以前はもっと急であったが、生活する中で、徐々に地形が変更されてきた。神社などはほぼそのままの場所にあるので、地形を見る条件に適している。川崎側は平坦なため、土地の高低がつかみにくい。しかし、地図を頼りに微高地を探し、そこから流路跡などが推測できる。自然堤防は、現在の生活では無用の長物になってしまい。ほとんどが削られ、そこに自然堤防のあったことすら知らないで生活をしている。

明治の終り頃から、都市が膨張してきて、世田谷区や川崎市がその影響を多く受けるようになる。その最も顕著なものが、鉄道（私鉄）の敷設である。その完成により、人々の移動は更に広がりを見せた。指標としての学校の移転新設や観光地・遊園地、住宅化などが、町の景色を変えていった。その最も大きな影響を受けたのが農業であった。

地名もその変化に合わせて、変化していった。明治 22 年の町村制により、大きく町村が括られ、旧村は大字となった。更に、小字はほとんど目にするのがなくなった。中心町のランドマークだけが目印では心もとない。

この調査研究に、川崎市、川崎市民ミュージアムから貴重な資料を貸していただきました。世田谷区からも協力をいただき、資料の活用と講演・探訪にも参加し、情報交流ができました。川崎市立中原図書館には、講演会の会場を提供していただき、またその期間に「パネル展」を開催できたことは、研究のまとめの方向付けができ大変ありがたかったです。ここにお礼申し上げます。

多摩川兩岸の地形や土地利用からの考察—
——高津区・中原区と世田谷区を中心に——

平成 29 年 3 月 31 日

発行 川崎市

編集 日本地名研究所

